

## 節宇亀山先生墓碑銘に関する一考察 —墓碑銘から読む亀山雲平の業績と人柄—

中島 友子, 中嶋 裕子

### A study of the Inscription on Setuu Kameyama's Tombstone — Memories of Setuu Kameyama's Personality and Achievements in the Inscription on His Tombstone —

Tomoko NAKASIMA, Hiroko NAKAJIMA

Kameyama Unpei (1822-1900) worked to build the political and ideological foundation of Japan as well as Harima area from the end of the Edo era to the Meiji era. A man of virtue, he was called Saint Harima

Before the Meiji restoration, he was a great scholar and a statesman of the Himeji clan. He served his masters faithfully to save the Himeji clan and its people in a strife-torn age. In his later life, after the Meiji restoration, he became a great educator with approximately 3,000 followers.

His tomb is in Keifukuji temple in Himeji. This paper examines the inscription of the tomb, and consider his personality and achievements.

**Key words** : Setuu Kameyama's tomb, statesmen of the Himeji clan, educator, masters Unpei served, from the end of the Edo era to the Meiji era  
節宇亀山先生墓碑銘、姫路藩士、教育者、雲平の仕えた姫路藩主、幕末から明治へ

### はじめに

節宇亀山先生すなわち亀山雲平（1822～1899）は幕末から明治への激動期にその生涯を公のために捧げ、播磨の歴史において特筆すべき功績を残した人物である。雲平は混迷を深める姫路藩の重臣として代々若い藩主を支え、藩士と領民を守る重責を果たした。明治維新後は教育者として多くの優れた人材を輩出した。78歳で波乱に満ちた生涯を閉じ、

姫路端松山景福寺に葬られている。最近幕末の志士への関心が深まっているが、いまだ亀山雲平の業績を知る人は少ない。

この度、現姫路市飾磨区都倉にある中島家において、節宇亀山先生遺蹟之碑に関する資料とともに節宇亀山先生墓碑銘が記されている原稿が、本文庫の中から発見された。明治から昭和にかけて中島家の当主であった中島久吉（1875～1940）は、亀山雲平の弟子であり節宇亀山先生遺蹟之碑にも寄与していた。

1) 近畿医療福祉大学 (Kinki Health Welfare University) 〒679-2217 兵庫県神崎郡福崎町高岡1966-5  
2) 福山平成大学 (Fukuyama Heisei University) 〒720-0001 広島県福山市御幸町上岩成正戸117-1

本稿においてその原稿を紹介する。

本稿は、節宇亀山先生墓碑銘を検証し雲平の足跡を辿ることにより、雲平の全体像に迫る一助となることを目的としている。まずⅠで景福寺墓地内の節宇亀山先生墓碑とそれに刻まれた墓碑銘の写真により、墓碑の全貌を捉える。Ⅱで中島家が所有する墓碑銘文を紹介し、Ⅲで墓碑銘の読み下し文と現代語訳を記す。この墓碑銘には雲平が仕えた藩主を縦糸に雲平の足跡が記されているため、Ⅳで藩主と雲平とのかかわりを検証する。Ⅴで墓碑銘の雲平は「君主であった」をふまえ、君子と雲平について、Ⅵで墓碑を建立した養孫亀山茂理について、Ⅶで撰文し書した南摩綱紀について記す。

本稿は、播磨史と雲平について論述するとともに雲平から中島久吉への書簡を発表した拙稿「郷土史の考察—播磨史と亀山雲平の生涯」<sup>1)</sup>と、雲平の死後16年を経て雲平を敬慕した門人たちにより建立された節宇亀山先生遺蹟之碑の碑文を検証した「播磨聖人 亀山雲平—節宇亀山先生遺蹟之碑にみる雲平の思想と人柄」<sup>2)</sup>に続くものである。先の拙稿においても雲平の生涯と業績、思想と人柄について記しているが、「郷土史の考察」では概要を、「節宇亀山先生遺蹟之碑」においては、教育者としての側面から雲平の教育観と思想を中心に著した。

今回は墓碑銘で新しく確認されたことども、すなわち藩主とのかかわり、さらなる雲平の生涯と業績、思想と人柄を記す。雲平の生き方は現代の我々の生き方に多くの示唆を与えるものとする。なお本稿中の年齢は数え年である。

## Ⅰ. 節宇亀山先生墓碑銘全貌

### (1) 節宇亀山先生墓碑

節宇亀山先生の墓は姫路端松山景福寺の墓地に位置する。墓碑の写真は1から3である。内容はその下に記す。



写真1 (正面より)



写真2 (左側面より)



写真3 (右側面より)



写真5 (墓碑裏面)

## (2) 節字亀山先生墓碑銘

墓碑銘の写真は4から6である。内容はその下に記す。



写真4 (墓碑左側面)



写真6 (墓碑右側面)

## Ⅱ. 中島家所有の墓碑銘文

中島家所有の墓碑銘文は縦24センチメートル、横33センチメートルの大きさの紙に記されている。数箇所実際の墓碑銘とは異なっている。7行目「顕徳翁」となっているが「顕



徳公」の誤りである。発見された時には「翁」の横に「公」が書かれ訂正されていた。11行目に最後部に「翁」とあるが、墓碑には「翁」は見られない。8行目「教授清廉」は「教授翁清廉」で、18行目郷葬礼は「郷葬之禮」であり、16行目の第1字「生」は「人」である。

原稿では3行目に「実」と、4行目と11行目に「与」と12行目に「辞」とあるが、いずれも実際は旧字体の「實」、「與」、「辭」となっている。配列の違いは墓碑銘の写真とこの原稿を比較参照されたい。

國家日卦開明人情月流輿衡而謹願思君子若吾師即于翁翁未多  
見其定也翁諱美和字由之稱敬佐又源五右衛門後改而云平節字  
其號龜山氏姬路藩世臣父諱白之實福國縣丞翁字來綱龜  
山成將後事其女翁其弟二十歲喪父与兄剛毅事母至孝養極  
至十八歲擢藩學教授讀剛毅公叔後高永四年以護命學江戶  
昌平堂為詩文係事藩主得光公進翁在室日安和暇危坐終  
喪居三年歸為顯徳翁侍讀公勵精圖治績較著者公啓沃之功唐  
多焉及開亭公復封擢為大監察兼教授清廉率先一藩風俗  
新政增俸五百七十石當時國家多難公陞大老職翁在藩輔政  
使無闕顧之憂其功多矣既而公致仕崇寧堂公後明治元年正月  
伏見之役起王師通國疆翁与藩士歸順遂得主家存祀者亦翁  
與有力焉在藩公立翁為侍讀遷中二姓建頭無幾病辭職後為  
松原八幡社祠官停下帷教授名家敬曰觀海翁遠近來學者甚  
衆三二年稱教三事兼事政事學語辭翁為令備後房外  
恭謙而內儼正歷任諸職勸諭事壹擇公爾必私對家人始實客遇門  
生如朋友奉身如便服暇食必躬居松原九十年其志無怠來訪者  
日夕接踵翁每吐哺迎之入稱為播磨聖人云廿二年五月六日病歿文  
政五年閏四月二十日生七十八年鄉令哀悼如喪考妣用鄉葬禮於豐政宮福  
壽山先塋之次有詩文稿若干卷其推著甚多皆官載家公始取之荒  
不氏生三男一女白先歿繼室西松氏無子而失歿長男有子實乃翁  
為仲次子授理郎之職家翁之歿也伯藩主翁伯仲之賜贈金壹千兩置  
墓教也銘曰勉乎養德奉職忘身授人謙讓修己恪勤厥行儼正  
敬言和溫公是式風俗常時君子人乎君子人也明治三十八年五月  
五月五日 五等南亭綱紀撰并書當時年八十矣

資料1 中島家所有の墓碑銘文

### Ⅲ．節宇龜山先生墓碑銘の書き下し文と現代語訳

節宇龜山先生墓碑銘の内容を理解するため書き下し文と現代語訳を記す。

#### (1) 書き下し文

国家は日々開明に赴くも、人情は月々輕儉に流る。而れども謹みて君子は吾が節宇翁のごとくあるを願ふ。世に未だ多くは其の比を見ざるなり。翁諱は美和、字は由之。佐又源五右衛門と称敬せらる。後雲平と改む。節宇は其の号なり。龜山氏は、姫路藩の世臣なり。父諱は百之。実は福田繁彝の第二子にして、来たりて龜山成将の後を嗣ぎ、其の女を妻とす。翁は其の第二子なり。十歳にして父を喪ひ、兄剛毅と母に事へ、孝養すること極めて至れり。十八歳にして藩学の授読に擢せらる。剛毅歿して翁後を承く。嘉永四年、藩命を以て江戸の昌平黌に学び、詩文係と為る。尋いで藩主緝光公逝く。翁黌に在りて、日々礼服を穿、危坐して喪を終ふ。居ること三年、歸りて顯徳公の侍読と為る。公勵精し治を図る。政績較著たり。翁啓沃の功居多し。閑亭公封を襲ぐに及び、大監察兼教授に擢せらる。翁清廉たりて率先す。一藩の風俗漸く改む。俸を増すこと百七十石に至る。此の時に当たり、国家難多し。公大老職に陞る。翁藩に在りて政を輔け、内顧の憂ひを無からしむ。其の功多し。既にして公致仕す。樂堂公後を承く。明治元年正月伏見の役起く。王師国疆に逼るや、翁藩士と帰順す。遂に主家の祀りを存するを得たる者も、亦与かりて力有り。裕齋公立つや、翁侍読と為り、中小姓組頭に遷る。幾くも無く病みて職を辞す。後松原八幡社の祠官と為る。傍ら帷を下ろして教授す。家塾を名づけて觀海講堂と曰ふ。遠近より来たりて学ぶ者甚だ衆し。二十一年少教正に補せらる。尋いで神職取締等の諸職を兼ね。翁

人と為り、眉目俊秀、外は恭謙たりて内は儼正たり。諸職を歴任す。鞠躬尽瘁すること公爾にして私を忘る。家人に対すること賓客のごとく、門人を遇すること朋友のごとし。身を奉ること節儉にして、貧窮に賑恤す。松原に居ること凡そ二十年、其の徳を景慕して来訪する者日夕に踵を接す。翁毎に哺を吐きて之を迎ふ。人称して播磨の聖人と為すと云ふ。三十二年五月六日病歿す。文政五年閏正月二十日生まるるを距つること七十八年なり。郷人哀悼すること考妣を喪ふがごとし。郷葬の礼を用ひて姫路景福山の先塋の次に窆むる。詩文の稿若干の巻有り。其の他の雜著甚だ多し。皆家に蔵せらる。翁始め荒木氏を娶り、二男一女を生む。皆先に歿す。継室の西松氏子無く、亦先に歿す。長男亨遺女有り。乃ち内山仲の次男茂理を養ひて之に配し、以て家を嗣がしむ。翁の歿するや、旧藩主酒井伯之を悼み、金若干円を賜賻す。蓋し異数なり。銘曰はく、学に勉め徳を養ひ、職を奉じて身を忘る。人に接すること謙讓たりて、己を修むること恪勤たり。厥の行ひは儼正たりて厥の言は和温たり。弟子は是を式り、風俗は醇に歸す。君子たる人か。君子たる人なり。

明治三十六年五月

正五位勲五等南摩綱紀撰し並びに書す  
時に年八十有一

養孫 龜山茂理之を建つ

#### (2) 現代語訳

国家は日々に開明へと向かっているが、人情は月々に輕薄へと流れている。しかし、君子たるものは我が節宇翁のようであることを謹んで願う。世の中にその類[節宇翁と肩を並べる人物]をそれほど多くは見たことがない。翁は諱は美和、字は由之、佐又源五右衛門と呼ばれ敬われていた。その後、雲平と改めた。節宇はその号である。龜山氏は姫路藩

に代々仕えた家臣である。父は諱は百之。実は福田繁彝の第二子であったが、亀山成将の後を嗣ぎ、その娘を娶った。翁はその第二子である。十歳で父を失い、兄の剛毅とともに母に仕え、この上もなく孝養を尽くした。

<sup>(1)</sup>十八歳で藩学の授読に抜擢された。剛毅が亡くなり翁が後を嗣いだ。嘉永四年、藩命により江戸の昌平黌に学び、詩文係となった。まもなく藩主の<sup>(2)</sup>緝光公が亡くなった。(その時)翁は(昌平)黌において、日々礼服を着、居住まいを正して喪を終えた。三年経って(故郷に)帰り<sup>(3)</sup>顕徳公の侍読となった。(顕徳)公は精神を奮い立たせて政を行い、(その)功績は顕著であった。翁が君主を教え導いた功績は多かった。<sup>(4)</sup>閑亭公が先代の領分を受け継ぐと、大監察兼教授に抜擢された。翁は清廉潔白で率先して物事にあたった。藩内の風俗は次第に改まっていった。俸禄が増えて百七十石になった。この時、国家には難事が多かった。(閑亭)公が大老職に昇進した。翁は藩にあって政治を補佐し、藩内の憂いをなくさせた。その功績は多かった。やがて(閑亭)公は官職を辞した。<sup>(5)</sup>楽堂公がその後を継いだ。明治元年正月伏見の役が起きた。天皇の軍〔朝廷の命を受けた備前藩の軍〕が国境に迫って来ると、翁は藩士とともに帰順した。その結果、主家の祀りを存続することができたことにも、また、関与して力を尽くした。<sup>(6)</sup>裕齋公が立つと、翁は侍読となり、中小姓組頭になった。まもなく病気になり職を辞した。その後、松原八幡社の官司となった。そのそばで垂れ幕をおろして教授した。(その)家塾を名づけて観海講堂という。遠くからも近くからも(翁のもとに)やって来て学ぶ者はたいそう多かった。二十一年に少教正に補せられ、まもなく神職取締などの諸職を兼任した。翁は人となりが眉目俊秀で、外[人]には恭しくへりくだり、内[自分]には嚴格

であった。諸職を歴任した。(何事にも)公<sup>おおやけ</sup>を考え、私<sup>わたくし</sup>を忘れるように一所懸命労力を尽くした。家人には賓客のように対し、門人には朋友のように接した。一身を奉じて節約に努め、貧しい者に金品を恵み与えた。松原におよそ二十年間いた。その徳を仰ぎ慕ってやって来る者は、一日中後を絶たなかった。翁はいつも食事中でも口の中のものを吐き出してすぐに出迎えた。人は称して播磨の聖人と言ったという。三十二年五月六日病没する。文政五年閏正月二十日に生まれてから七十八年である。郷里の人々は亡き父母を弔うようにその死を悼み、郷葬の礼をもって姫路景福山の先墓の中に葬った。詩文の原稿が若干の巻ある。その他の雑著はたいそう多い。すべて家に置かれている。翁は初め荒木氏を娶り、二男一女を産んだ。(しかし)みな先に亡くなった。後妻の西松氏には子どもがなく、また先に亡くなった。長男の亨には遺女がいたので、内山仲の次男茂理を養子として結婚させ、家を嗣がせた。翁が亡くなると、旧藩主酒井伯はその死を悼み、金若干円を贈った。思うに(これは)手厚い待遇である。銘に言う、学に勉め徳を養い、職を奉じて我が身を忘れる。謙虚に人に接し、真面目に励んで己を修めた。その行いは嚴格で、その言葉は穏やかであった。弟子はこれ〔翁の人となり〕を手本とし、風俗は人情が厚い状態に戻った。(翁は)君子たる人であるのか。(まことに)君子たる人である。

明治三十六年五月

正五位勲五等南摩綱紀が撰して〔文章をつくって〕書く 時に年は八十一歳  
養孫 亀山茂理がこれを建てる

なお( )内は読むための補いのことばであり〔 〕は直前の表現についての注である。また傍線及び番号は、以下の墓碑銘から読む



姫路藩主と雲平関わりの説明のために筆者によるものである。

#### Ⅳ．墓碑銘から読む姫路藩主と雲平の関わり

亀山氏は姫路藩に代々仕えた家臣である。父、百之は福田繁彝の第二子であったが、亀山成将の後を嗣ぎその娘を娶った。雲平は第二子である。1844年に兄剛毅が病没し亀山家を継ぐ。

姫路藩は江戸時代の初期に池田輝政が入封して以来、西国の押さえとして特異な歴史を歩んだ。本多、松平、榊原、酒井と続く藩主は、徳川家と信頼関係のある大名ばかりであり、このことが幕末の姫路藩に、そして雲平に多大なる影響を及ぼした。

雲平は酒井時代の藩主に仕えたが、この時期姫路藩を特徴付けるのは、家老河合隼之助道臣（寸翁）（1767～1824）の藩政改革であった。私塾仁寿山校を創立し、著名な学者ら（頼山陽、森田節斎、大国隆正など）が仁寿山校を訪れた。ここには尊皇攘夷の思想家が多く、藩校の好古堂に対し、時代を先取りする自由な学問的風土を育てていた。しかし、その後姫路藩は勤皇派と佐幕派に分裂、対立し佐幕派の中心となる藩となっていく。

雲平は激動の時代、藩主を支えた。墓碑銘には雲平の仕えた歴代藩主のもとに雲平の足跡が刻まれている。姫路藩の歴史を作った藩主とその一翼を担った雲平とのかかわり（資料2参照）について以下に補足説明し、姫路藩の家臣として仕えた雲平の足跡を辿る。藩主名は前述の現代語訳の傍線を参照されたい。

##### (1) 5代目藩主酒井忠学<sup>ただのり</sup>

墓碑銘によると18歳で藩学（好古堂）の授読に抜擢されている。墓碑銘には藩主名は記されていないが、その時の藩主は5代

目酒井忠学（1808～1844年）であった。幼い頃から優秀であった雲平は、藩学の授読として忠学に仕えた。

##### (2) 6代目藩主緝光公酒井忠宝<sup>ただとみ</sup>

忠学が37歳でこの世を去り、6代目藩主の緝光公酒井忠宝（1829～1853年）が後を継いだ。忠宝は4代目姫路藩主の酒井忠実の孫であるが、本家に男子がいなかったため叔父忠学の婿養嗣子となり、忠学の死去に伴い1844年に16歳で6代目藩主となった。

雲平は藩主忠宝にお目見えする。そして好古堂勤務精励につき金5両と、今後もお一層学問に精励せよとの言葉を賜った。1851年に藩命により江戸の昌平黌に学び、1853年詩文係となった。昌平黌で全国から集まった秀才と交友があり、雲平の名前も知られていった。忠宝は25歳時に没した。墓碑によると、雲平は藩主の死後も江戸に留まり藩主の恩に報いるように昌平黌において、日々礼服を着、居住まいを正し学問に専念して喪を終え、3年後に姫路に帰ったのである。1950年に昌平黌に寄宿し、1951年昌平黌で入り、佐藤一斉に師事、1853年12月1日に退学したのではないかと思われるが、定かではない。墓碑銘にある3年後というのはいつのことなのか明確ではなく、今後の課題である。

##### (3) 7代目藩主顕徳公酒井忠顕<sup>ただてる</sup>

その後、雲平は姫路藩に戻り7代目藩主顕徳公酒井忠顕（1836～1860）の侍読<sup>3)</sup>となった。忠顕は、4代藩主酒井忠実の孫にあたる。三河田原藩から姫路藩に養子入りし、酒井忠宝の婿養子となり、1853年に18歳で家督を相続した。しかし、その7年後25歳にしてこの世を去る。翁が若い君主を教え導いた功績は多かったとされている。雲平は1855年藩校好古堂の教授となり、1856年には江戸在番を拝命している。1858

年には帰藩したと思われる。

(4) 8代目藩主閑亭公酒井忠績<sup>ただしげ</sup>

藩主閑亭公酒井忠績(1827~1895)は、分家旗本五千石の酒井忠誨の長男であったが、姫路藩主酒井忠頼に子がなかったため、1860年に養子となり34歳で姫路藩を相続した。(33歳ともいわれるが、1860年12月9日相続のため34歳である)忠績35歳の1862年5月、家督を相続したため姫路の国許へ帰ることを許され江戸を発つ。その途中に幕命により京都に立ち寄り、罷免された京都所司代の臨時代官を9月の末まで4ヶ月務めた<sup>4)</sup>。その京都警備の功績により36歳(1863年)で老中首座となり、就任後は兵庫開港をめぐる朝廷対策に奔走した。

忠績の就任後、姫路藩の気風は変化した。それまでの姫路藩は尊皇攘夷の思想家が多く、藩校の好古堂では、時代を先取りする自由な学問的風土が築かれていたが、忠績の就任後は佐幕派としての色を強めていった。酒井家は徳川家と血縁関係があり、関が原の戦い以前より徳川家の家臣として仕えていた譜代大名であったが、特に忠績が徳川家との主従関係を重んじていたこともその一因である。姫路藩の佐幕派の立場を決定付けたのは、1864年におこった甲子の獄である。

甲子の獄とは、尊王攘夷運動の反幕府色を強める過激な行動に不安を抱いた家老高洲隼人広正が、藩主の意向を汲み、尊攘派の弾圧に乗り出した事件である<sup>5)</sup>。自刃、斬首、永牢などの厳しい処分が下された。この弾圧事件がきっかけとなり、保守佐幕派が藩論を掌握するようになった。藩主忠績は、翌年1865年に江戸幕府最後の大老に就任し、姫路藩は幕府を支える中心的な藩となる。

1867年(慶応三年)12月7日、列強諸国

の念願であった兵庫港が開港した。これは、朝廷・幕府両勢力から見れば勢力拡大を狙う諸外国の侵略行為でもあり、国内は騒然としたが、姫路藩は西宮の警備に当たり幕府方の援護を担った<sup>6)</sup>。

墓碑銘に、雲平は「大監察兼教授として清廉潔白を旨とし、率先して物事に当たった」とあるが、抜擢されたのは1861年のことである。藩内は勤皇派と佐幕派に分裂し対立を深めていた。「藩内の風俗は次第に改まっていった」とあるが、これは甲子の獄と推測される。処刑を決めるにおいて、雲平は佐幕派と目されながらも、全員死罪に決すべしとの厳しい雰囲気の中、「罪ノ輕重ヲ論ゼズシテ刑二処スルハ妥当ナラズ……」と冷静に事の顛末を見極め、大目付として公平に対処する態度を貫き、正を守った<sup>7)</sup>。藩主が不在時も正を守り重臣として責務を果たした。

(5) 9代目藩主樂堂公酒井忠惇<sup>ただとし</sup>

忠績の後、忠惇(1839~1907)が継いだ。忠惇は、姫路藩分家旗本五千石酒井忠誨の四男として江戸に生まれ、1864年に実兄で姫路藩主の酒井忠績の養子となり、1867年忠績の隠居により29歳で姫路藩主となった。1867年大政奉還が行われ、諸大名は国許に帰りことの成り行きを見守っていたが、忠惇は慶喜の呼びかけに応え会見した。その忠義により老中上座に任命された。忠績、忠惇と二代にわたり、大老、老中上座と幕府の要職に就き、姫路藩は譜代筆頭藩となった。

翌年、1868年(明治元年)に鳥羽伏見の戦いが1月3日に始まったが、3日で幕府軍は大敗を喫した。將軍慶喜は江戸に逃れ、姫路藩主忠惇も同行した。忠惇は大阪城に詰める重臣松平孫三郎に不戦の命を残し江戸に下った。



1月10日には將軍慶喜の討伐命令が下り、佐幕派として認識された姫路藩は朝敵となり備前藩の攻撃を受けるに至った。戦鬭か降伏かの苦渋の選択を迫られたが数度の交渉後、藩主の不戦の命を守り、降伏、無血開城を決定した。しかし東上中の長州軍から備前軍に、攻撃せよ、もし備前藩が攻撃せぬなら長州藩が攻撃するとの通達があり、雲平らの平和的解決を破棄して攻撃が始まったのである。1月16日には、景福寺山頂からの号砲を合図に攻撃が開始された。雲平は敵陣に乗り込み大將池田図書助と談判し、攻撃を中止させた。16日中に藩士は城外に退去した。雲平も景福寺に捕われの身となり、城に帰ったのは翌17日朝であった。17日に備前藩の兵士が入城し、無血開城となった。姫路藩を代表して交渉にあたったのは、大目付である雲平と斉藤鑑介であった。この時、無血開城ができたのは、雲平ら重臣の采配によるものである。藤原は「藩主不在の中で姫路藩重臣は、朝廷尊奉の念を確立し、酒井家の家名存続と本願などを願って藩論を統一し、姫路城開城という苦渋の選択を決断した。藩主から城と領地を預かる国許の家臣として忠節を尽くす、ぎりぎりの決断であった」<sup>8)</sup>と述べている。

しかし、降伏後も、姫路藩は朝敵とみなされ、領地をいったん朝廷に預け謝罪に誠意がなければ没収するという「朝敵罪第3号」の処分を示されていた。開城後も姫路藩は混乱の中にあっただが、重臣らは「藩主・もしくはそれに代わる者の上京謝罪」により、朝廷の寛典に浴し、本領安堵と家名の存続を図ろうとする。雲平を含む重臣らは上京し、謝罪にあたるよう隠居後も多大な影響力を持っていた忠績の説得にあたった。大目付であり、藩校好古堂教授を兼ね

ていた雲平は、信任が最も厚かった。しかし、忠績は、酒井家と徳川家は祖先を同一とし將軍家姻戚関係があり、幕府300年の間に12人の大老が出たがそのうち4人は酒井家が務めており、老中も数人いると、徳川家への忠誠を誓い謝罪を拒否した。そのため、姫路藩主忠悰は1868年2月には老中を罷免され、3月朝廷より官位剥奪、入京停止処分、5月には隠居謹慎を命じられた<sup>9)</sup>。

#### (6)10代目藩主裕齋公酒井忠邦

忠悰の強制隠居の後、姫路藩の謝罪の誠意が認められなければ、城と領地は没収となり、藩士・領民ともに多大なる混乱が生じるため、重臣たちは新しい藩主を立てて藩の救済の道を探った。支藩の伊勢崎藩主酒井忠強の弟直之助を、謹慎中の藩主忠悰の養子として藩主名代に立てた。江戸から謝罪のため3月1日大目付雲平同松崎左平らはこの新藩主となる後の酒井忠邦を守り京に向かった。東海道を通る予定であったが、官軍江戸攻めのため進軍中の知らせが入り、雪の中仙道を急いだ。しかし、入京は許されなかった。雲平は側近として危険な道中を警護にあたりながら、帰藩した。

忠悰の強制隠居後は、10代目藩主として一族の忠邦(1854~1879)が14歳で後を継いだ。新政府の樹立後、各地の幕府領は新政府によって次々と没収された。姫路藩としては、家名の断絶、領地の没収などの事態を避けるためには、新政府への恭順の姿勢を一刻も早く示す必要があった。徳川家の恩か新政府への恭順か苦しい決断を迫られていた。

藩主となった忠邦は新政府に与することを明確に示すため、新政府に対して15万両の献金や旧幕府派の家臣の大量処分を行った。謹慎中であった勤皇派志士は謹慎を解

かれ、雲平も藩政改革の一環として佐幕派であったため、5月13日に御用御免となった。同日、藩政改革と度重なる嘆願書（忠績の名で家臣が提出）が朝廷に受領され、勤皇の志を厚く相い立てる誓約書を新政府に提出することで姫路藩は救済されることとなった<sup>10)</sup>。

その後、忠邦は版籍奉還により藩知事となり、1871年の廃藩置県で免官された。忠邦は26歳の若さでこの世を去った。

墓碑銘には雲平は「侍読となり、中小姓組頭になった。まもなく病気になる、職を辞した。」とある。雲平は若い忠邦を侍読として支えた。中小姓は、江戸時代、侍と足軽の中間に位置する下級武士について用いられた呼称であり、身分的には侍の最下層に属し、幕府軍制においては、徒歩で將軍に従う歩行小姓組の主だった者をさすため、雲平は大目付から左遷されたと解釈できる。雲平はその手記「慶雲日録」に、「右五月十三日源五右衛門儀御役御免、（中略）去廿日朝廷より本領安堵の御沙汰出て候事其の委細御布告書等は御布令録に出る也、余の名此の巻以って慶雲二字偶然の事といえとも其の維持宗社実に慶雲の祥の如く也」と本領安堵と家名存続の喜びを記している<sup>11)</sup>。五月十三日に雲平は御役御免になったのであるが、「主家の祀りを存続させることができた」ことへの安堵と喜びで感無量であった。

雲平は、幕末の混乱期、若い藩主を支え家名の存続に大きな役割をはたし、藩士と領民を守る一翼を担った。墓碑銘にはこの詳細は書かれていないが、勤皇派と佐幕派とに分裂し対立する時代に藩の重臣であった雲平は苦渋の決断を下す日々で心が休まる<sup>とき</sup>瞬間はなかったであろう。「病気になり職を辞した」とあるが、実際は佐幕派と

して肅清された結果と考えられる。このようにして雲平は政治の世界から身を引いた。

## V. 君子と雲平

国を憂い高い志を持った多くの人々の尊い命が失われる修羅場を姫路藩の重臣として生き抜いた雲平は、再び政治の世界に戻ることは無かった。その後姫路市の現白浜町に移り住み、1873年には松原八幡社の宮司となり、傍ら、久敬舎、後に観海講堂で漢学を教授した。1888年（明治21年）には明治政府より、少教正<sup>12)</sup>に補せられ、まもなく神職取締などの諸職を兼任した。雲平は明治32年、78歳でこの世を去ったが、人々は亡き父母を弔うようにその死を悼み、郷葬の礼をもって姫路景福山の先墓の中に葬った。旧藩主酒井忠惇もまたその死を悼み、金若干円を贈っている。誠に手厚い待遇であった。

墓碑銘には「学に勉め徳を養い、職を奉じて我が身を忘れる。謙虚に人に接し、真面目に励んで己を修めた。その行いは厳格で、その言葉は穏やかであった」とある。そして「君子たる人であるのか。君子たる人である」と結んでいる。

論語には君子という言葉が80数箇所出てくる。君子とは立派な徳をなした人、またはそうなろうと努力している人、さらには高位の人も言う。雲平の理解を深めるため君子とはいかなる人物を指すのか、論語<sup>13)</sup>よりその輪郭を掴み取る。

孔子は「君子は仁の道から離れることは無い。（里仁第四一五）」「剛（物事に恐れず、立ち向かう強さ）、毅（苦難に耐え忍ぶ強さ）、木（質実で飾らない）、訥（口数が少ない）なのは最高の徳である仁に近い（子路第十三—二十七）」「君子はゆったりとしていておごりたかぶらない。小人はおごりたかぶっ

てゆったりしたところがない（子路第十三―二十六）」そして「安心して幼い遺児をあずけることができ、また国政を任せることができ、重大事に臨んでも節を曲げることはない人を君子というのであろうか。いうまでもなく真の君子の人だ（泰伯第八―六）」また「君子は道を得ようとつとめるが食をえようとせずとつとめない……君子は道が会得されないのを憂えて決して貧乏を憂えない。（衛霊公第十五―三十二）」と述べている。

子路が君子の条件について尋ねると「自分の身を修め、人をうやまうことだ……人を安んずること……天下万民を安んずることだ。（憲問第十四―四十四）」すなわち自分を磨き世のため人のために役立つ学びをする、自己の修養に励み万人を安らかにすることであると述べている。さらに「君子は、誰とでも公平に親しみ、ある特定の人としかたよって交わらない。（為政二―十四）」そして「道義を本とし、礼によって行い、へりくだって物を言い、まことによってことを成し遂げる。こういう人物が真の君子だなあ（衛霊公第十五―十八）」と述べている。

雲平と孔子の述べる君子と重なるところが多い。人を安んずるため難局に命を呈して姫路藩、多くの家臣と領民を守った。雲平の座右の銘は國爾忘家であり、家臣として学者として教育者として私を忘れ公のために尽くした。國爾忘家の印が今も子孫である松原八幡神社宮司龜山節夫に残されている。雲平の教育方針の一つの柱は「国家一旦ノ用ヲ待ツ」であり、世のため人のために役立つ学びを自ら行い教育した。謙虚な人柄で清貧を貫いた。

次に雲平の君子たる人柄を示す逸話を記す。

「先生ノモノヲ見ラル、ヤ必ズ其事ノ熟否ヲ察セラレ以テ反省ノ心ヲ起サレザルコトナシ、仮令ハ下卑ナル事ニモ小妓ノ舞ヲ

奏スルヲ見テハ其熟達セルニ感ゼラレ、芝居ヲ見テハ其芸ニ熟練セルニ感ゼラレ、常ニ自分等ハ我學問ノ未熟ナル此等ノ者ニ対シテモ恥ズベキノ至リナリト云ハル、コト常ノ如クナリシト云フ」<sup>14)</sup> 弟子であった大西樗太郎の後日逸話であるが、常に謙虚で自分の浅学を恥じる雲平を如実に語る逸話である。学問への真摯な姿勢が現れている。

「先生身ヲ奉ズルコト節儉ニシテ常ニ綿服ヲ着テ満足セラレ若シ親戚故旧ニ貧シキモノアレバ之ヲ救助セラル、コト幾回ナルカ知レザルガ嘗テ或塾生帰省セントシテ其旅費ノ乏シキニ心ヲ痛メ居レリ先生之ヲ知リ月謝ヲ納メシ時之ヲ数倍ニシテ之ニ与ヘヒソカニ其旅費ヲ助ケラレ塾生其恩ニ感ジ年々歳々書ヲ寄セテ起居ヲ問ヒテ恩ヲ忘レザリト云フ」

これは、白浜の米沢菊治の紹介する雲平の逸話である。質素儉約を旨とし、絹ではなく木綿を身に着け、親戚や旧知の友はもちろん塾生の生活にも目を配り、必要とあらば用立てていたのである。雲平自身の生活は必ずしも豊かであったとはいえないという<sup>15)</sup>。

「先生ノ名ヲ聞キ徳ヲ慕イ遠近相集ルモノ甚多カリシ、サレバ其会スル塾生ノ柄モ亦雑多ナリ、殊ニ青年ノ常トシテ居室ノ如キモ甚ダシク取り乱シノ俣ナルコトアリ、一日日課ヲ終エテ塾生相集リテ牛肉ノ会食ヲナシ焜爐ハ言フ迄モナク葱ノ残りヨリ茶碗皿鉢サテハ蜜柑ノ皮ニ至ル迄凡テノ食器食品ノ残部モ其俣ニ打ち連レテ散歩ニ出掛ケタリ 今迄騒ガシカリシ塾舎ノ静マリシカバ先生如何ニト之ヲ伺フニ全ク此始末、先生静ニ之ヲ片付室内ヲ掃除シ食器迄モ夫々所定ノ場所ニ整頓セラル、程経テ塾生ノ群騒々シク帰り来リ其室ニ入ラントシテ此様ヲ見テ互ニ顔ヲ見合スノミ、只翌日ノ



叱責ヲノミ氣遣フ、而シテ翌日ノ講義ニ際スルモ何等先生ノ言此所ニ及ブモナシ、塾生以テ叱ラル、ヨリ怖シトナシ以後品行頓ニ改リ此如キ行更ニナカリシト云フ」<sup>16)</sup>  
塾生の散らかしたままの部屋を自ら整理整頓し、何ら叱ることなく自らの後姿で教授した。雲平の教育観が現れている。

次は、大阪の小西道郎の語る逸話である。

「或日、先生姫路ノ商賈ニツキ買物ヲナサントサレシ時、主人例ニヨリ懸値ヲ以テ答フ、先生其価ヲ払ハントス、随從ノ車夫傍ヨリ其不当ノ高価ナルヲ見兼価ヲ値切ラントス、先生其過言ヲ詰リ主人売値ハ相当ノ定メナラン何ゾ買手ヨリ高下ヲ云フベキゾト代価ヲ払ヒテ買取り帰レリ、主人之ヲ恥ヂ能ク其面ヲ知り後々ハ懸値ヲ云ハザリシト云フ」

明治になっても掛け値で、客とのやり取りのなかで値を決めるのが普通であった。雲平もそのことを知らなかったわけではない。ばかりあいのようなことをして値を決めるのを好まなかったのである。雲平の清廉潔白さを表している逸話である<sup>17)</sup>。

これらの逸話からも雲平の謙虚で清廉潔白な人柄や、質素な暮らしぶり、教育観の一端をうかがい知ることができ、論語にある君子の姿を髣髴させる。

1915年大正4年に弟子により、節宇龜山先生遺蹟の碑が建立されたが、其の事実からも多くの弟子から敬愛された君子としての雲平がうかがえる。

墓碑銘には「学に勉め徳を養い、職を奉じて我が身を忘れる。謙虚に人に接し、真面目に励んで己を治めた。(以下省略)」とあるが、雲平を論語の君子像と重ね合わせた簡潔明瞭なる見事な漢詩である。

## VI. 墓碑を建立した養孫龜山茂理(内山蒼軒)について

雲平は10歳の時に父を失い、22歳で兄を失う。荒木氏を娶とり、二男一女をもうけたが、皆先に逝去した。後妻の西松氏には子どもがなく、また雲平が74歳の時に死去した。政治の世界だけでなく私生活においても多くの死と向き合わねばならなかった。

明治22年(1889年)に、内山茂理(26歳)を長男の亨の長女で雲平の孫娘である陽(19歳)の婿養子に迎えた。茂理は、雲平が松原八幡神社の祠官の傍ら教鞭をとっていた学問所、観海講堂における非常に優秀な門人であった。

茂理は、内山仲の次男として、文久3年(1863年)6月21日姫路に生まれ、明治5年(1872年)に父に従い飾東郡東山村に移り住み、昭和17年(1942年)10月5日に80歳で没した。(写真7を参照)

茂理は亨が明治28年(1895年)10月28日に死去したため、龜山家を継ぎ、祖父であり恩師でもある雲平をよく補佐し、観海講堂の運営に心血を注いだ。雲平が没して観海講堂は閉校されたが、後には恰六合小学校で三十有二年子弟教育に携わり校長を務めた。又、神官としても多くの功績をあげ、任官され従七位に叙せられた。

雲平死去に際しての大葬儀の模様を「巳丑凶事始末記、龜山雲平遺稿集、同遺芳纂録、蒼軒正集、蒼軒詩集」など貴重な文献を顕している。絵も上手で島琴江の薫陶を受けたと言われている。茂理は字体も雲平とよく似ており、性格は温和で勤勉、几帳面で雲平に生き写しのようなだったと言われている<sup>18)</sup>。養孫である龜山茂理が節宇龜山先生墓を建立した。茂理は雲平と同じ墓地に眠る。現在もその子孫が白浜神社の宮司である。



写真7（亀山茂理墓碑銘）



写真8（亀山陽墓碑銘）

二人の墓は雲平と同じ墓地に位置する。

## VII. 墓碑銘を撰し書した正五位勲五等南摩綱紀について

最後に、墓碑銘を撰して書いた南摩綱紀について記す。

文政6年（1823年）11月25日に生まれ明治42年（1909年）4月13日に没した。名は綱紀、字は士張、号を羽峰と称した。会津若松の出身である。幼くして会津藩校の日新館に学び、弘化4年（1847年）25歳の時、藩命をもって江戸昌平黌に学び、杉田成卿・石井密太郎らについて蘭学を修めた。藩命によって安政2年（1855年）から安政4年（1857年）にかけて、西国及び九州の諸藩を歴遊して各地の風俗、藩政の概要などを見聞して「負笈管見」を著している。戊辰戦争後、藩命を帯びて庄内藩に赴き、会庄同盟を画策した。会津城陥落後、越後高田に禁固に処されたが、まもなく赦されて淀藩の招号に応じて漢学を総督した。その後、京都府学識に就き太政官・文部省の役人を経て東京大学教授・女子高等師範学校教授兼高等師範学校教授を歴任した。享

年87歳であった<sup>19)</sup>。

雲平と綱紀はともに昌平黌で学んだ学友であり、親交が深かった。雲平宛の書簡も残されている。

## おわりに

節宇亀山先生墓碑銘を検証したが、混迷を深める激動の幕末、雲平は姫路藩の重臣として長きに渡り若い主君を支え続け、身を挺して姫路藩を守ったことが明らかになった。幕末の姫路藩の歴史を辿ると、心の休まることのない重責を負った壮絶なる日々であったことが裏づけられる。明治維新後は南摩綱紀をはじめ、昌平黌での他の多くの学友のように官吏の道を歩むことなく、名実ともに大儒学者であったが、白浜で一教育者として漢学を教授し人生を全うした。私利私欲に目を奪われず、公に身を投じ君子としての行き方を貫いた。政権が移行したというだけでなく封建社会から近代社会への過渡期であり、政治、

経済、文化などあらゆるものが欧米の近代文明に圧倒され、それまでの伝統の中で培ってきた日本の価値観が変容し、「人情が日々軽薄へと流れる中」漢学を修め公のために生き抜いた雲平の生き方からその高潔さ、誠実さ、忠誠心、節操を学ぶことができる。多くの死と向き合わねばならなかった雲平の内面はいかばかりであっただろうか。

雲平は、姫路藩の好古堂の教授を務めた名立たる儒学者でもあり、姫路藩の命運を担う大監察や備前軍使応接役の重責を果たした実務的政治手腕をも備えていた人物でもあった。政治の世界から退いた後、門弟3,000人ともいわれ教育者として多くの国家一旦の用を待つ人材を輩出した。大きな足跡を残した雲平であるが、雲平の業績はさほど知られていないのが現状である。本稿がその一助となれば幸いである。

本稿を執筆するにあたり、亀山節宇顕彰会会長長野哲氏及び姫路木鶏クラブ会長三木英一氏に多大なご尽力賜りましたことをここにお礼申し上げます。碑文の読解は、姫路東高等学校教諭岩崎壽光氏にご協力を賜りました。心よりお礼申し上げます。

## 引用・参考文献

- 1) 中嶋裕子、中島友子：郷土史の考察—播磨史と亀山雲平の生涯．近畿福祉大学紀要、8（1）、25－36、2007
- 2) 中嶋裕子、中島友子：播磨聖人 亀山雲平—節宇亀山先生遺蹟の碑にみる雲平の思想と人柄、近畿医療福祉大学紀要、9（1）、11－23、2008
- 3) 天皇の側に仕えて学問を教授する学者のこと。律令制のもとでは大学寮の博士あるいはこれに近い学識を有する人物が任命された。主として四書五経などの儒教の経典が講義されたが、『史記』や『文選』、『老子』などそれ以外からの講義も行われた。だが、また、撰閲家や將軍家の当主に学問を教授する学者も侍読と呼ばれるようになる。
- 4) 安政の大獄に異論を唱えた者たちによる井伊直弼暗殺後、朝廷が当時就任していた酒井忠義（小浜藩主）の罷免要求をし、後任の大坂城代松平宗秀も、井伊直弼の信任が厚かったという理由で任命されなかった結果、京都守衛と京都所司代の臨時代行役としての特命を帯びた入京であった。
- 5) 姫路や京都で相次いだ佐幕派要人の暗殺に関与したとして、藩士ら70人以上が裁かれた。京都において尊王攘夷運動が最も激しかったのは文久2～3年（1862～63）であるが、この時京都の警護にあたったのは河合惣兵衛宗元を中心とする姫路藩尊攘派の志士であった。この時、藩士は諸国の尊攘派の志士と交わり、行動を共にしていた。
- 6) 年末に家茂の上洛が決定すると、江戸留守居役を命じられた。第2次長州征伐の事後処理、幕府軍の西洋式軍制の導入など、幕政改革に尽力した。
- 7) 中嶋裕子、中島友子：郷土史の考察—播磨史と亀山雲平の生涯．近畿福祉大学紀要、8（1）、27、2007
- 8) 藤原龍雄：姫路城開城．107、神戸新聞総合出版センター、神戸、2009
- 9) 1869年（明治2年）に蟄居預かりを解かれ、2年後には、実兄忠績と共に静岡藩士族酒井録四郎忠恕（忠績の実弟で、忠悌の実兄）方へ終身同居することを許された。明治40年（1907年）11月11日正三位に叙され、同日69歳で死去した。



- 10) 藤原龍雄：姫路城開城. 190, 神戸新聞総合出版センター, 神戸, 2009姫路城史下巻、100 「証書・嘆願書一覧」 37号史料
- 11) 同上, 191  
279ページの「慶雲日録」は、慶応四年（1868年）正月、鳥羽伏見の戦いの直後、備前藩との応接から記述されている。姫路城を開城させる備前藩との交渉、開城後の混乱、本師の到着、京都からの使者、江戸下向、姫路藩士の脱藩、薩摩藩との交渉、勤皇派の復権、本領安堵と御役御免まで書かれている。本文を本領安堵と家名存続を勝ち取った喜びを「慶雲の祥のごとし」として締めくくっている。
- 12) 教正は、明治初年に教部省に置かれた教導職の最上位である。
- 13) 伊與田寛：仮名論語． 論語普及会，大阪，2008.
- 14) 長野哲：青松白沙、1号、1990
- 15) 長野哲：青松白沙、5号、1992.
- 16) 長野哲：青松白沙、2号、1990
- 17) 長野哲：青松白沙、3号、1990
- 18) 同上
- 19) 道坂昭廣：南摩綱紀『追遠日録（一名下野紀行）』 訳注、四天王寺大学紀要、第47号、2009年3月 [http://www006.upp.so-net.ne.jp/e\\_meijiishin/jinbutsu/nanmatunanori/nanmatunanori.htm](http://www006.upp.so-net.ne.jp/e_meijiishin/jinbutsu/nanmatunanori/nanmatunanori.htm)



節宇亀山先生墓碑銘に関する一考察 ―墓碑銘から読む亀山雲平の業績と人柄―

1861	文久元年										40	11月5日	藩主より抜擢され大觀察兼教授の大役に就任、大目付を拝命、俸禄170石		
1862	文久2年										41		坂下門外の変 (1月) 生麦事件(8月)		
1863	文久3年										42			薩英戦争(7月) (11月に和議)	
1864	元治元年										43			長州征伐・第1回、 姫路藩甲子の獄 (12月26日)	
1865	慶応元年										44	藩にあって政治を輔佐		長州征伐・第2回	
1867	慶応3年	9代	酒井 忠悰 ただとう	1839～ 1907 享年69歳	10月4日 29歳 2月28日						46			大政奉還、王政 復古の大号令	
<p>文久2年35歳(1862年)、5月、忠績は幕命により上洛し、京都所司代臨時代行した。安政の大獄・井伊直弼が暗殺された後、朝廷が当時の就任者酒井忠義(小浜藩主)の罷免を要求し、後任の大坂城代松平宗秀も、井伊直弼の信任が厚かったという理由で任命されず、京都守衛と京都所司代(江戸時代に京都の治安維持の任務にあたった役職)の臨時代行の特命を帯びて入京。臨時代行を約4ヶ月間務めた。</p> <p>京都市中警備の功績により、36歳で老中首座となる。老中就任後は兵庫開港をめぐって朝廷対策に奔走した。家茂の上洛決定後、御三家の徳川慶鷹、忍侯の松平下総守とともに江戸留守居役を命じられる。そして第2次長州征伐の事後処理、幕府軍の西洋式軍制の導入など、幕政改革に尽力した。</p> <p>一年後の1864年(元治元年)に老中を退いた</p> <p>大老に昇進</p> <p>2月28日兄忠綱の隠居</p> <p>姫路藩分家幕臣五千石御小姓組番頭酒井安房守忠諒の四男として江戸に生まれる。文久元年(1861年)12月幕臣五千石寄合席酒井求次郎忠夏(養子)となり、24歳で文久3年(1863年)10月4日家督を相続。元治元年(1864年)実兄で姫路藩主の酒井忠綱の養子となり、慶応3年(1867年)2月28日兄忠綱の隠居により28歳で姫路藩主となり、実名を忠悰に改める。同年3月2日雅楽頭に任じられ、同年12月30日老中に任命される。将軍・徳川慶喜に従ってあくまで佐幕派の立場を貫いて江戸まで赴いたため、姫路藩は朝敵の対象となった。慶応4年(1868年)2月5日老中を罷免され、同年3月7日官位を剥奪され、入京を禁止される。このため1868年5月2日、忠悰は強制隠居となり、5月20日隠居謹慎を命じられた。明治元年(1868年)12月12日駿府の徳川亀之助へ預けとなり、明治2年(1869年)9月28日駿居預かりを解かれる。明治4年(1871年)2月3日実兄忠綱とともに静岡藩士族酒井鏐四郎忠恕(忠綱の実弟で、忠悰の父兄)が終身同居することを許される。明治40年(1907年)11月11日正三位に叙され、同日69歳で死去。</p>															



1868	明治元年	10代	酒井 忠邦 ただくに	裕齋公	1854～ 1879 享年26歳	5月2日 15歳	播磨姫路藩の第10代最後の藩主。1868年5月2日、忠悌は強制隠居となつて一族の忠邦が15歳で後を継ぐこととなった。忠邦は新政府に与することを明確にするため、新政府に対して15万両の献金や旧幕府派の家臣の大量処分を行なった。その後、版籍奉還により藩制となり、1871年7月14日の廃藩置県で廃官された。1879年3月25日、26歳で死去。	47	1月13日 備前軍使に接役を拝命 大觀家として備前軍が間近に迫り 姫路城明け渡し 1月17日 朝廷の命を受けた備前軍が間近に迫り 姫路城明け渡し 5月13日 失脚 6月14日 絵図文御番を拝命 8月 役職を辞す	鳥羽の戦い(11月3日～11月6日)
1869	明治2年							48	3月 総社門御番方を拝命 10月1日 名を雲平と改める(?)	藩籍奉還
1871	明治4年							50	長男亨に家督を譲り隠居(1月28日)して恭吉から雲平へと名を改める。(?)	廃藩置県
1872	明治5年							51		学制を發布
1873	明治6年							52	7月23日 飾東郡松原村の松原八幡神社の祠官となり同神社の境内地に「久教舎」設立 8月17日 飾磨県御雇いにより地誌提要取調べをする 12月18日 大教正有馬頼咸より教導職9級試補を申し付けられる	
1877	明治10年							56		西南の戦争
1878	明治11年							57	11月28日 播磨国神道事務分局副長担任となる	
1879	明治12年							58		
1881	明治14年							60	8月13日 内務省より権大講義に補せられる	
1884	明治17年							63	9月17日 一等仮試験合格証を兵庫県皇典講究分所より下付される 10月1日 塾舎を建築、観海講堂落成	
1885	明治18年							64	9月20日 神道管長稲葉正邦より大講義に補せられる	
1886	明治19年							65	10月16日 飾東郡祠官掌副取締りとなる 10月19日 権少教正になる	
1887	明治20年							66	6月16日 神道姫路分極内局顧問となる 12月26日 少教正になる	
1888	明治21年							67	11月23日 飾東郡祠官掌取締り担任となる	
1889	明治22年							68		憲法發布
1890	明治23年							69	8月12日 兵庫県皇典講究分所受け持ち委員となる	教育勅語發布
1892	明治25年							71		
1893	明治26年							72		
1894	明治27年							73		日清戦争
1895	明治28年							74	6月10日 午後時妻死去(生前は不明) 10月28日 長男亨死去	
1896	明治29年							75		
1897	明治30年							76		
1898	明治31年							77	1月1日 神職監理局姫路市飾磨郡分局長となる 1月11日 姫路神社及び射権兵主神社社司を兼務する	
1899	明治32年							78	4月26日 射権兵主神社社司兼務を免じられる 5月6日 観海講堂において韓のため死去 姫路瑞松山景福寺に葬られる 旧藩主より金若干金を賜る	
1900	明治33年								10月 観海講堂閉校	
1915	大正4年								7月6日 節子亀山先生遺蹟之御除幕式挙行	

(注) 年齢は数え年で掲載